

インドネシア、バタック社会におけるヤシ酒をめぐる習俗 —象徴的意味に焦点をあてて—

於 静岡文化芸術大学 南 176 大講義室
池上重弘（静岡文化芸術大学教授）

報告の構成

はじめに	3 授乳期初期の女性による利用
1 生産と流通	4 儀礼における利用
2 日常の消費	むすび

はじめに

A バタック社会

- ・インドネシアのスマトラ島北部、トバ湖周辺の内陸高地を故地とする。
- ・水稲耕作・畑作、水牛・豚等の家畜飼育が主たる生業。現在はほとんどがキリスト教徒。
- ・20 世紀はじめから北スマトラ東岸部への移住が増加。今日では都市部に住み近代的部門で活躍するトバ・バタックも多い [cf. 池上 1995 ; 1997]。

B ヤシ酒とはなにか

- ・ヤシ酒とはヤシの花序や花軸、成長点などを切り、そこからしみ出してくる液を集め、発酵させたものである [吉田 1997 : 177]。サトウヤシの場合、雄花軸を切った部分からにじみ出る糖分の多い液を集めて煮詰めると黒砂糖ができるが、この液には自然の酵母が多く含まれているため、発酵してヤシ酒になる [吉田 1995 : 244-245]。

C バタックのヤシ酒をめぐる先行研究

- ・ヤシ酒生産技術の比較民族学的研究… [吉田 1991 ; 1992 ; 1995 ; 1997]
- ・ヤシ酒飲み屋の社会的機能についての研究… [Sirait dan Sihotang 1986 ; Ginzel 1984 ; Marpaung 1989]

D 本講演の目的

- ・バタックの故地である北タパヌリ県と移住先の都市を射程に置き、生産と消費の全体を紹介
- ・その上で、儀礼的場面での利用について紹介
- ・そこからヤシ酒の象徴的意味合いを考察

E 調査方法

- ・バタックの故地である北タパヌリ県のうちバリゲ郡、移住者の多い北スマトラ州の州都メダンとジャワ島にある首都ジャカルタで調査。
- ・1997 年 8 月から 10 月までの 2 ヶ月間、インドネシアでの現地調査。

1 生産と流通

A 北タパヌリ県におけるヤシ酒の生産と流通

- ・人口 1,063 人（1990 年）。1997 年時点ではヤシ酒職人は 8 人の男性。
- ・作業手順は、「叩く」、「切る」、「溜めた樹液を回収する」、「味を調整する」。
- ・発酵の調整に、前日の樹液と「ラル」(raru) を用いる。ラルはマングローブと総称されるヒルギ科の植物の樹皮か [cf. 赤嶺 1996 ; 小崎 1990]
- ・スキルの習得が必要（樹液の出そうな花軸を見つけ適切に叩く技術と、ラルの加減による発酵の調整が重要な技術）。
- ・ヤシ酒職人の「直営店」、他のヤシ酒飲み屋と専属契約、村外から来る仲買人に販売。
- ・ヤシ酒は現金収入源として重要。ヤシ酒職人の生活水準は普通の農民より高い。

B 都市におけるヤシ酒の生産と流通（トバ・バタックが行くヤシ酒飲み屋の場合）

- ・サトウヤシは自生せず、ココヤシの樹液からヤシ酒を作る。
- ・ココヤシの樹液にラルを加え、苦みのあるアルコールを含んだヤシ酒を飲む。

2 日常の消費

A 北タパヌリ県における日常の消費

- ・ヤシ酒飲み屋の名称は、都市ではラポ (lapo)、故地ではクダイ (kedai)。
- ・故地のクダイは男の空間。職業を問わず夕食後集まる。情報の結節点として重要。

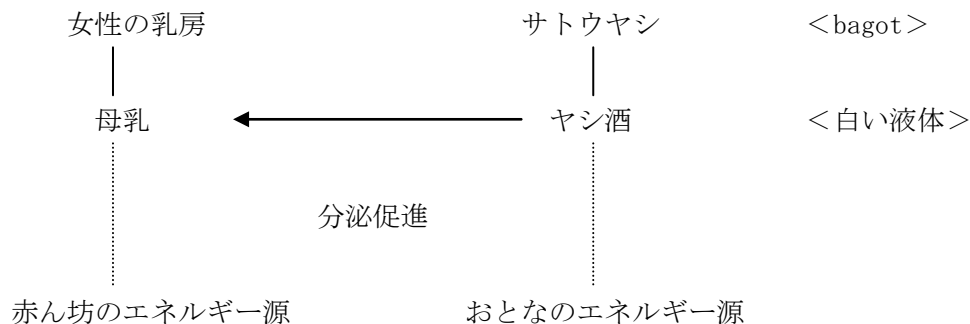
B 都市における日常の消費

- ・食堂としてのラポとヤシ酒飲み屋としてのラポに二分化。
- ・都市ではヤシ酒を飲まない男も多い。ヤシ酒を愛好するのは移住 1 世との指摘も。

3 授乳期初期の女性による利用

A 授乳期初期の女性がヤシ酒を飲む理由

- ・出産後 7 日間ほどラルを入れない甘いヤシ酒を飲むとよいとされる。
- ・理由 1 : 血行を良くし、栄養補給するため。
- ・理由 2 : 母乳の分泌を促進するため。
- ・ヤシ酒は母乳のメタファー（隠喩）。



B 実際の利用

- ・北タパヌリ県では、年配の女性のみならず若い女性も飲んでいるが、体質的に受け付けず飲まない女性もいる。
- ・ジャカルタではほとんど飲まれないが、メダンでは飲む女性もいる。バタックの人口比が高いメダンではヤシ酒が入手しやすいからと考えられる。

4 儀礼における利用

A サトウヤシとヤシ酒の起源に関する説話

- ・サトウヤシは死んだ女性の生まれ変わりとする説話。
- ・東南アジアに広くみられる死体化生神話の一類型と考えられる。

B 儀礼で用いられるヤシ酒

- ・祖霊や死者および生者に対して捧げられるが、神々には捧げられない。
- ・儀礼で用いるのはラルを混ぜないヤシ酒。トゥアック・タッカサン (tuak tangkasan) と称される。タッカスとは「明るい、はっきりした」という意味の形容詞。
- ・「生」(き) のヤシ酒の場合、混じりけのない「純粋性」や元来の味の「明瞭性」を強調されるものと理解できる。

C 埋葬儀礼におけるヤシ酒利用

- ・孫を持つ死者の墓にヒガンバナ科の植物を植える「マヌアン・オップオップ」。
- ・オップオップという植物を植えた上にヤシ酒をかけ、ウッパマを唱える。

Ini on ma tuak tangkasan. (これはトゥアック・タッカサンである。)

Tangkas ma uju purba, (東の方向がタッカスであるように。)

tangkasan ma uju angkola. (南の方向がタッカスであるように。)

Tangkas ma hita maduma, (我々が繁栄することがタッカスであるように。)

tangkasan ma hita mamora. (我々が裕福になることがタッカスであるように。)

- ・二行目からの四行詩形式がウッパマ (umpama)。ウッパマの前半部の二行には実質的な意味はない。後半部の二行で儀礼的言辞や格言的内容を表す。
- ・このウッパマでは将来の「繁栄」や「裕福さ」がタッカスであること(「はっきりしていること」「明瞭であること」)を祈願している。つまり、全体として表現したいのは「我々が繁栄し、裕福になるように」という点。ここではヤシ酒が豊穰性の象徴として用いられていると解釈できる。
- ・ただし今日では、植物を植えた上にヤシ酒を注ぐことは省略される傾向にあり、ヤシ酒が用意されたとしても、ラルを用いて発酵させた通常のヤシ酒である場合が多い。

D 長寿儀礼におけるヤシ酒利用

- ・老親に対する表敬の儀礼である「マヌランギ」。長男、長男の妻、次男夫婦…という順に、
①白飯、②豚肉料理、③飲み水、④ヤシ酒を与える。
- ・ここでもヤシ酒は豊穰性の象徴として用いられる。

むすび

A バタック社会におけるヤシ酒のシンボリズム

- ・ラルと混ぜ合わせない「純粋な」ヤシ酒は、豊穰性をシンボライズする重要な儀礼要素として用いられていると解釈することができた。
- ・東南アジア地域に広く認められる死体化生神話は、女性の多産性と植物の豊穰性を結びつける観念に裏打ちされているが、女性の化身とされるサトウヤシから採集される樹液が豊穰性の象徴として用いられるのも、女性の多産性と通底する豊穰性の原理がヤシ酒において象徴的に表現されると考えられているからである。

B 儀礼から日常へ

- ・ただし、今日では日常的利用の比重が高まり、都市部でエスニック・アイデンティティの拠り所となっている。

引用文献

- 赤嶺淳 (1996), 「ヤシ酒呑みのヤシ酒紀行ーフィリピン・ビサヤ地方の日常生活ー」『ヤシの実のアジア学』鶴見良行・宮内泰介 (編著), 東京: コモンズ, 151-177 ページ所収.
- Ginzell, L. Susan (1984), “Lapo Tuak, Arena Interaksi Sosial bagi Masyarakat Batak Toba: Studi Kasus Lapo Tuak Dame, Kelurahan Harapan Mulia, Jakarta Pusat (Skripsi).” Jakarta: Jurusan Antropologi, Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- 池上重弘 (1995), 「高い盛り土、堅い石ートバ・バタック族における改葬墓の歴史的变化をめぐってー」『南方文化』22: 62-89.
- _____ (1997), 「北スマトラのトバ・バタック村落における葬制と墓制ー死去時の葬儀と埋葬方法にみられる連続と変化ー」『比較家族史研究』11: 37-55.
- 小崎道雄 (1990), 「東南アジアの伝承ココナツ発酵食品(1)椰子酒」『Vesta』2: 22-26.
- Marpaung, Polmen (1989), “Fungsi Sosial Minuman Tuak pada Masyarakat Urban Suku Bangsa Batak Toba di Pematang Siantar (Skripsi).” Medan: Jurusan Antropologi, Fakultas Ilmu Sosial dan Ilmu Politik, Universitas Sumatera Utara.
- Sirait, Walter dan O. Sihotang (1986), “Berbagai Fungsi Kedai Tuak.” Pemikiran tentang Batak. Simanjuntak, B.A. (ed.) Medan: PD & PKB, Universitas HKBP Nommensen. pp.343-346.
- 吉田集而 (1991), 「インドネシアの酒」『季刊民族学』15(2): 96-103.
- _____ (1992), 「インドネシアのヤシ酒」『ザ・ステイタス』15(5): 58-59.
- _____ (1995), 「東南アジアのヤシ酒」『酒づくりの民族誌』山本紀夫・吉田集而 (編著), 東京: 八坂書房, 244-255 ページ所収.
- _____ (1997), 「酒」『事典東南アジアー風土・生態・環境ー』京都大学東南アジア研究センター (編著), 東京: 弘文堂, 176-177 ページ所収.